

谷口智彦著「同盟が消える日 - 米国発衝撃報告 - 」ウェッジ、2010年2月25日刊を読む

1. 米国、日本のどちらでも、高位の政治家たちはみな、いまある同盟に忠誠を誓っている。ところが、危機においてこそ信頼に足る、その名にふさわしいものとして、同盟を使えるようにするのに必要な決断は難しい。それゆえ、ほとんどなにもしようとしな——という、こんな現状が許されるのは、いま述べたような事情によるのである。
2. 本報告は、同盟について冷たい評価を示してきたけれども、もとより同盟にもはや無用の断をくだそうとしているのではない。過去には両国の国益に、それは見事に役立った同盟だった。いま、こうして問いを緊急に投げかけようとしているのは、米日両国の政策当局者、同盟マネジメントの当事者が、いまや理解しなくてはならないことがあると見るからにほかならない。
3. それは、同盟が今日何であって、何でないかということである。米日双方がそのあるべき価値に関して今後評価をした場合、それでは同盟は明日、何であり得て、何であり得ないかということだ。米日同盟関係は成立以来半世紀をなんなんとした後、その強化のため米日が共同して努力を傾注する期間としてさらに10年を費やした。にもかかわらず、深刻な弱さをはらんでいる。
4. 同盟の有効性とは、この先何であり得るのか。各々の国益によく資させるべく、そののところを両国政府はいまこそ考えなくてはならない。日本の安全保障について新しい仕切り直しをする——。いまが、そのときかもしれないのである。

P182 ~ 183

#### [コメント]

米国のシンクタンク、NBR(The National Bureau of Asian Research)から2009年11月に出版された「外れてしまった期待をどうする(Managing Unmet Expectations)」という報告書の谷口氏による危機意識に基づいた紹介の書。

日米安保条約に基づく日米同盟の危機的な状況を認識する上での必読書。

安全保障なしでは何もないと考えれば、これほど深刻な話はない。

- 2010年2月25日 林明夫記 -